

学位論文内容の要旨

学位申請者	山本（生野） 里花 【比較社会文化学専攻 平成21年度生】 (比較社会文化学専攻 平成27年3月31日単位修得退学)	要 旨
論文題目	音楽による共生 ―音楽療法場面の分析解釈から―	<p>本論文は、音楽療法の研究と現場に長年携わってきた申請者が、音楽療法の臨床場面を分析解釈することによって、人と人々が音楽を介して時間と場を共有する時に、どのようなことが起こり得るのかについて、「音楽による共生」という概念を用いて検証したものである。申請者はダウン症による重度知的障害を持つ女兒との6年間にわたるセッションを記録分析し、音楽に際立って高い関心を示すこの女兒と並列した関係の中で、療法士と対象者の実際の音楽行為をエスノグラフィ的に調査し、解釈している。</p> <p>本論文は2部構成になっており、第1部では臨床場面を3つ取り上げて、そこで起きていたことの検証を行ない、第2部では、この症例から見出すことのできる「音楽による共生」の諸様相を論じている。</p> <p>第1部では、まず、場面記述としてビデオ記録とセッション記録に基づき参加者の行為を時系列で並列して記述し、療法士、対象者、アシスタントのやりとりについて譜例を引用しながら解釈して記述、その上で音楽相互行為を抽出して分類・解釈を行ない、関係の概念図を作成した。</p> <p>第2部では、まず、「音楽による共生」について規定し、療法士との「音楽による共生」における対象者の独自世界と、逆に対象者との「音楽による共生」における療法士の独自世界を導き出した。その上で、音楽を共有する関係構造、相互に変化させられること、「地場」を創成しそこに「住まう」こと、という3点の「音楽による共生」の様相を明らかにした。</p> <p>本論文は、従来の音楽療法研究が、療法士が対象者の変化の事象の外側に立ち、必要な音楽的刺激をコントロールして与えるという構造であるのに対して、あくまで対象者と療法士が音楽を通じて並列して向き合う姿勢をとっている。そのことによって、音楽療法研究からさらに音楽学のとくに現象学的研究に展開し、音楽共同活動への示唆をも持つ新しい研究へと至った。</p> <p>本論文は、困難を背負う子どもが「生きる」と音楽との関わりについての、根源的な議論に通ずる内容もち、申請者がすでにアメリカを中心として海外での研究経験を積んでいることも含めて、国際的にも展開することが期待される研究である。論文自体は個人情報があるので、公開ができないが、その学術的内容と議論とは出版などによって公表されることが望まれる。</p>
審査委員	(主査) 教授 永原 恵三	
	教授 棚橋 訓	
	助教 井上 登喜子	
	准教授 中村 美奈子	
	十文字学園女子大学幼児教育学科	
	教授 宮里 暁美	